

(2)平成28年のトピックス

ア 平成28年 梅毒のまとめ

京都市における報告数は51例となり、前年までと比べて大幅に増加した。全国的にも近年は増加傾向にあり、平成28年は前年より約2000人増加し、5年前と比較すると5倍以上の報告数となっている。

性別内訳は、男性28例、女性23例であった。男性は、過去5年平均値(平成23年から平成27年まで)との比が2.75、前年比が1.22、女性は過去5年平均値との比5.48、前年比1.53で特に女性の報告数が急増した。

年齢階級別では、10～19歳が1例、20～29歳が21例、30～39歳が12例、40～49歳が6例、50～59歳が7例、60～70歳が4例となっており、特に20歳代の女性の報告増が顕著である。

病期別では、早期顕症梅毒(I期とII期)が39例、晩期顕症梅毒が3例、無症候が9例であった。

図1 京都市及び全国の報告数の推移

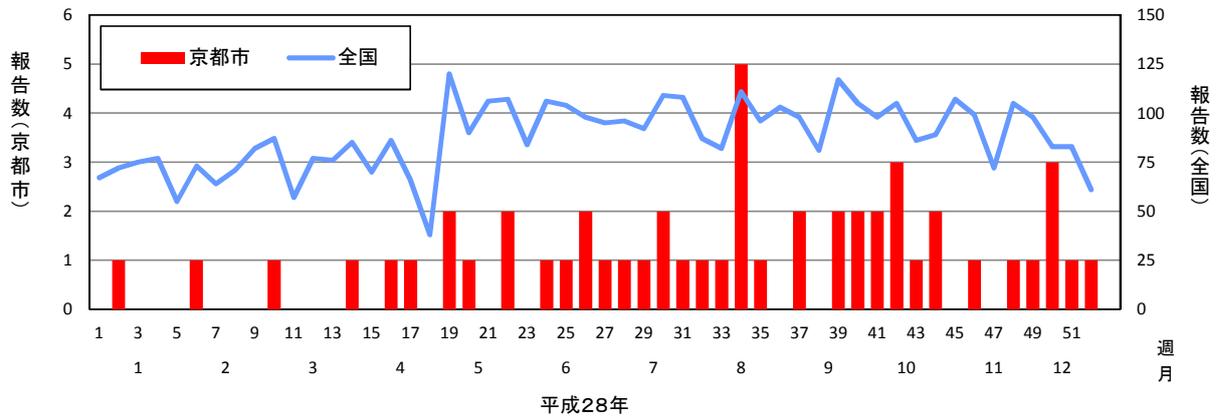
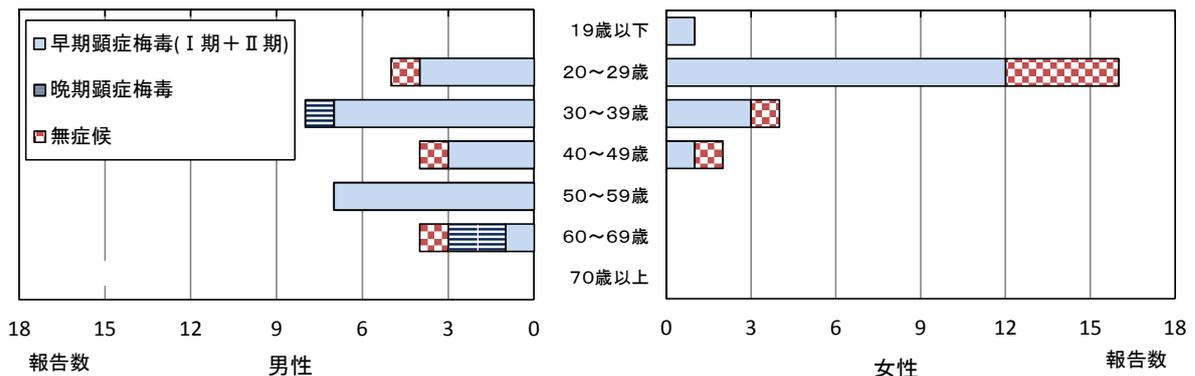


表1 京都市及び全国の年次報告数

		平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
京都市	男性	7	5	7	9	23	28
	女性	0	3	1	2	15	23
	合計	7	8	8	11	38	51
全国	男性	650	692	993	1284	1930	3174
	女性	177	183	235	377	762	1385
	合計	827	875	1228	1661	2692	4559

図2 京都市の性別、年齢階級別、病期別の報告数(平成28年)



## イ 平成28年 流行性耳下腺炎のまとめ

京都市における報告数は、1年間を通して、過去5年平均値を上回って推移した。特に夏以降は報告数がさらに増加した。全国でも年間を通して過去5年平均値を上回り、本市と同様に高い値で推移した。流行性耳下腺炎は数年おきに流行を繰り返す疾患であり、京都市の過去10年間の定点当たり報告数の推移をみると、平成22年に流行して以来の流行の年となった。年齢階級別割合では、6歳以下の乳幼児の占める割合が減少する傾向にあり、平成28年は60%になった。

図1 京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

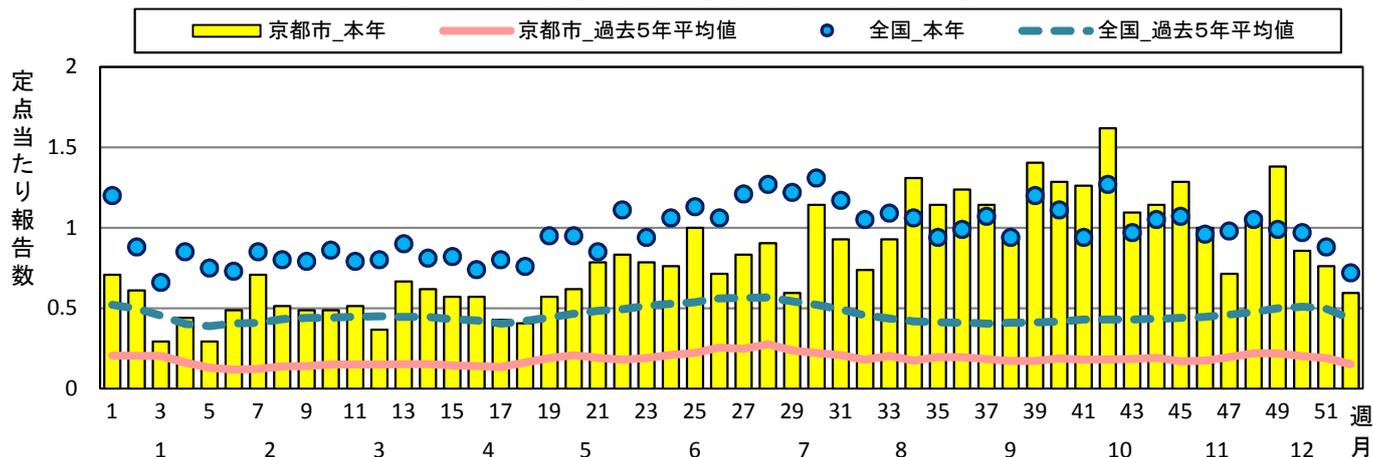


図2 京都市の過去10年間の定点当たり報告数の推移(平成18年～平成28年)

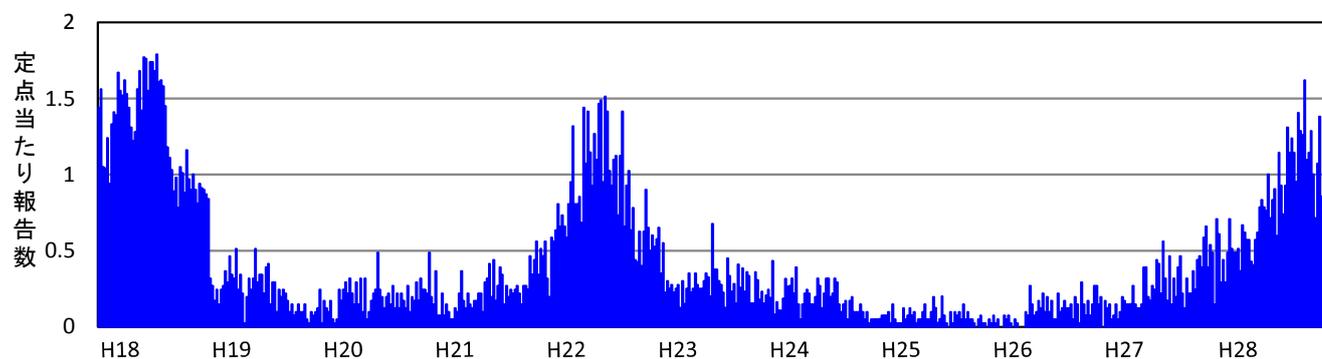
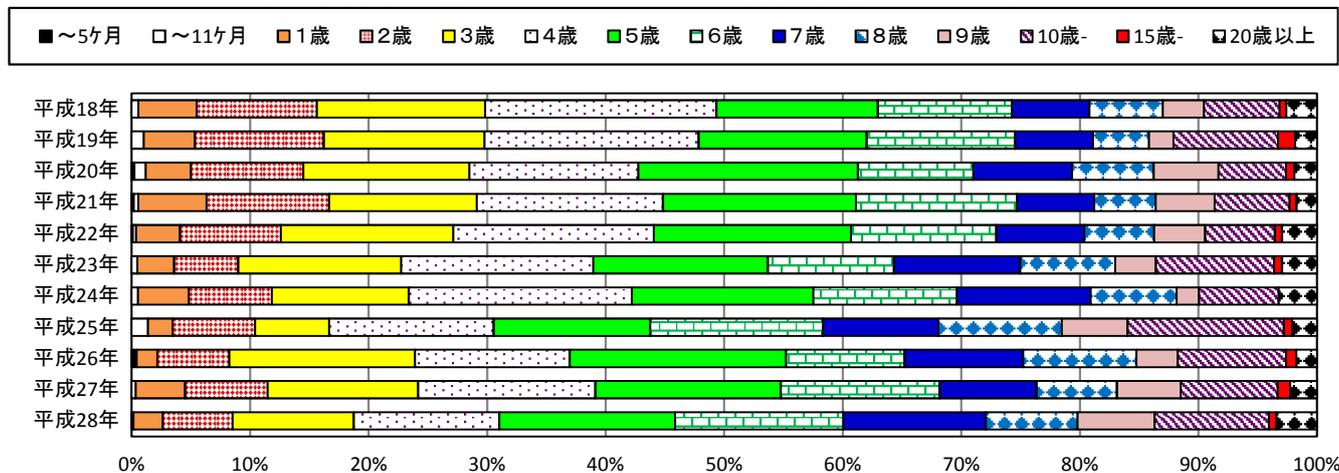


図3 京都市の過去10年間の年齢階級別割合(平成18年～平成28年)



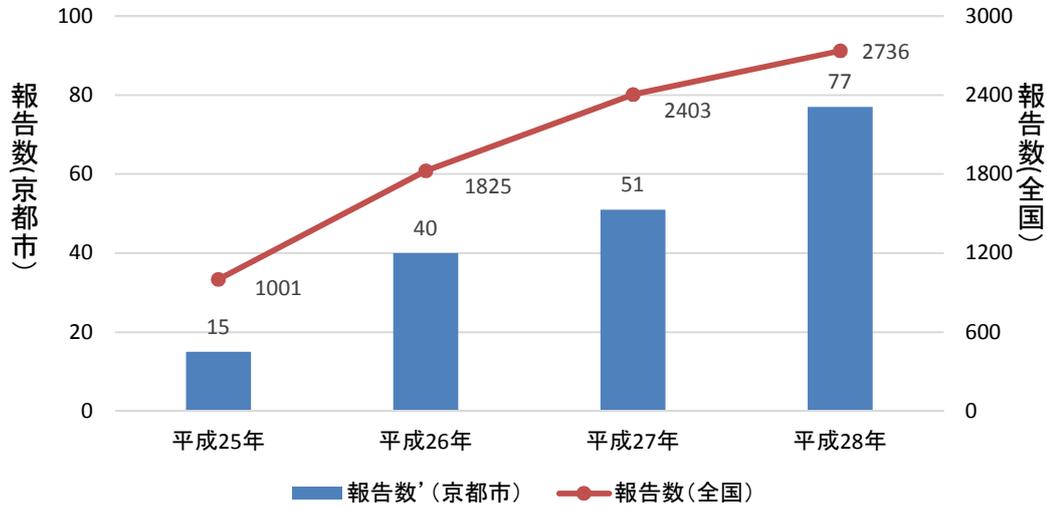
## ウ 平成28年 侵襲性肺炎球菌感染症のまとめ

京都市における報告数は年々増加し、平成28年の累積報告数は77例となり、五類感染症に指定された平成25年4月以降最も多い報告数となった。

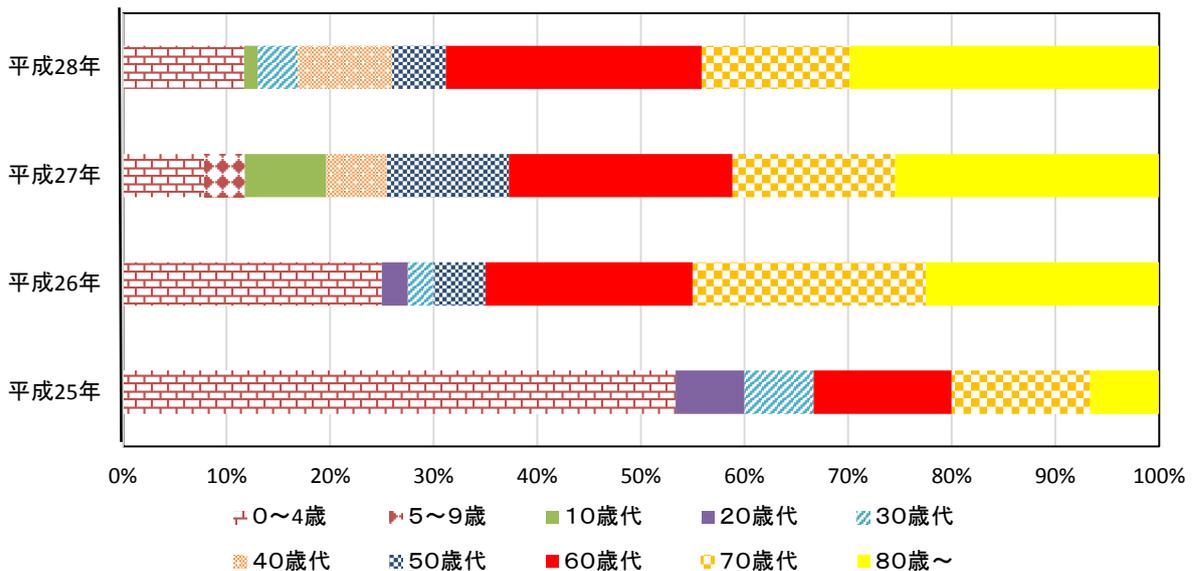
年齢分布を年別で見ると、平成26年以降はいずれも60歳以上の高齢者の報告数が全体の60%以上を占めている。また4歳以下の占める割合は平成27年以降、約10%にとどまっている。

肺炎球菌ワクチンの接種状況を見ると、定期接種対象となっている4歳以下の9例では、接種を受けていたのが7例、未接種1例、接種歴不明1例であった。他方、60歳以上の51例では未接種と接種歴不明が47例と90%以上を占めていた。

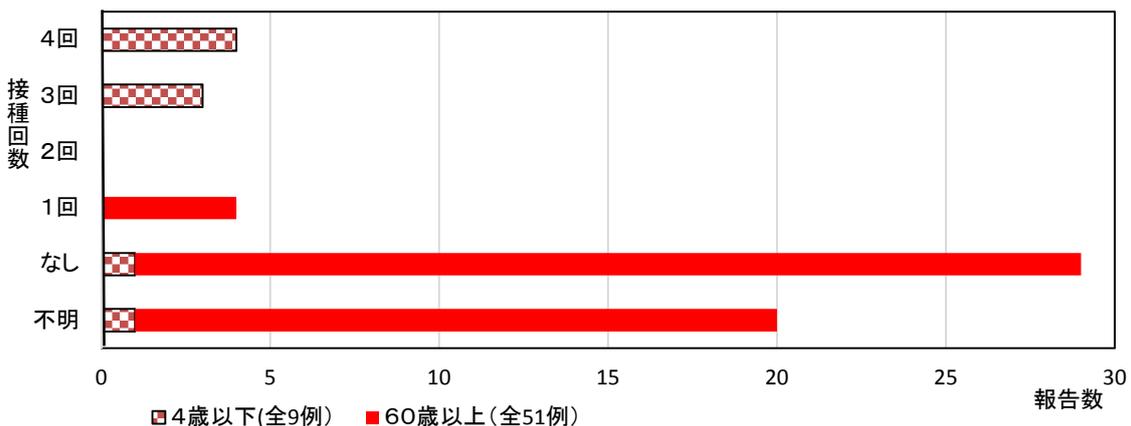
### 図1 京都市及び全国の報告数の推移



### 図2 京都市の年齢別報告数(平成25年4月1日～)



### 図3 4歳以下と60歳以上の報告例のワクチン接種回数(平成28年)



## エ 平成28年 インフルエンザのまとめ

平成27年/28年シーズンは、平成28年第2週(1月11日～17日, 2.18)に定点当たり報告数が「1.0」を超えて流行期に入り、第7週(2月15日～21日, 32.82)にピークを迎えた。その後、第12週(3月21日～27日, 9.29)に定点当たり報告数が注意報レベル「10」を下回り、第17週(4月25日～5月1日, 0.74)に「1.0」を下回った。

平成27年/28年シーズンの全国におけるインフルエンザウイルス分離・検出状況は、AH1pdm09型(48.2%)、B型(43.5%)、AH3(8.3%)の順であった。流行開始時からAH1pdm09型が主に分離・検出されて大半を占める一方、平成26年/27年シーズンに最も多かったAH3はわずかしこ検出されず、流行期からピーク時にかけてB型が増加し、終息に向かうにつれてB型の割合が増加した。

平成27年/28年シーズンの京都市の年齢階級別構成は、5～9歳(30.3%)が最も多く、次いで0～4歳(18.5%)、10～14歳(15.2%)の順であった。

また、平成28年/29年シーズンの流行は、平成28年第48週(平成28年11月28日～12月4日, 1.46)に定点当たり報告数が「1.0」を超え、直近5シーズンに比べて最も早い流行期入りとなった。第4週(1月23日～29日, 29.59)にピークを形成し、その後、第10週(3月6日～12日, 7.71)に「10」を下回った。なお、全国のインフルエンザウイルス分離・検出状況は、平成29年5月11日現在、AH3型(85.0%)、B型(12.3%)、AH1pdm09(2.7%)の順になっている。

図1 京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

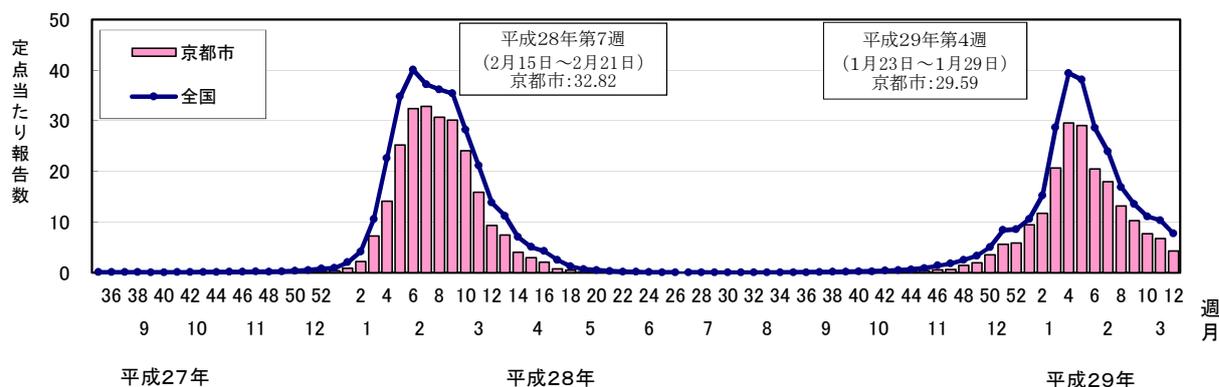


図2 全国のインフルエンザウイルス分離・検出数の推移

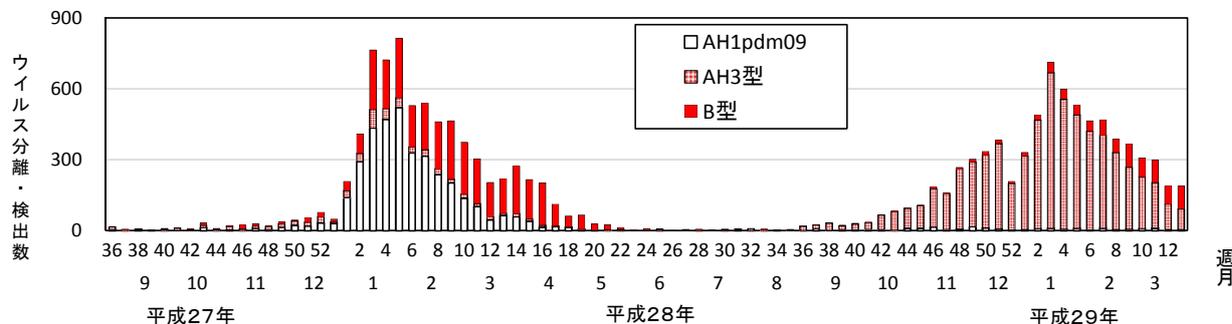


図3 京都市及び全国の年齢階級別割合



表1 京都市の過去5シーズンの流行状況

シーズン	H23/H24	H24/H25	H25/H26	H26/H27	H27/H28	H28/H29
「1.0」を上回った週	第51週	第1週	第52週	第49週	第2週	第48週
ピーク時の 定点当たり報告数 (ピークの週)	38.89 (第5週)	31.22 (第5週)	37.19 (第5週)	28.63 (第52週)	32.82 (第7週)	29.59 (第4週)
「10」を下回った週	第13週	第11週	第13週	第7週	第12週	第10週